

8. 田植機・播種機の要らない「あきたこまち」の湛水散播かくはん法（情報）			
<p>[要約]</p> <p>本法は、機械移植栽培に比べて1～2割減収するが、代かきした水田に乾籾を表面散播した後、トラクタのロータリで浅くかくはんし種子を土中に埋没させ、出穂始期に2週間田干しを行い倒伏抵抗性を高める省力的な湛水直播栽培である。</p>			
研究室名	中山間農業研究室	連絡先	0868-57-2758

#### [背景・ねらい]

既に「ふっくらももこ」を用いた省力的な湛水表面散播栽培技術が確立されているが、現在の奨励品種では耐倒伏性に問題があり適用できない。そこで、「あきたこまち」を対象にした省力的な湛水直播栽培法を確立する。

#### [成果の概要・特徴]

1. 湛水散播代かき法は、塩水選、種子消毒をした乾籾6kg/10aを代かきした水田に湛水表面散播し、標準ロータリで耕深4cmを目標に浅くかくはんする(図1)。
2. 苗立ちまでの期間が長いので、除草は初期剤(サンバード粒剤)と初中期一発剤(イネグリーン1キロ粒剤51)の体系処理とする(図1)。
3. 出穂始期以降は積極的に田干しを行い、田面を固めて倒伏抵抗性を高める(図2)。
4. 本法は育苗、カルパーコーティングや田植機、播種機などの農機具が不要であるため省力・軽労化が図れる。
5. 現地実証試験では収量が336～402kg/10aで慣行栽培よりも減収したが、減収率は13～14%であった(図3)。

#### [成果の活用面・留意点]

1. 立地条件や高齢化により機械移植栽培の継続が困難で、かつ減収が容認できる場合、また、ブドウなどとの複合経営で育苗・移植時期に労働力が競合する場合に適用できる。
2. 本法では、成熟期が移植栽培よりも10日～2週間程度遅延するので、適用地域は「日本晴」が移植栽培できる地域である。
3. 出穂始期に2週間程度田干しを行い、必要に応じて走り水を行うので、用水の便がよい圃場で適用する。
4. 作土層の深さのばらつきが苗立ちのばらつきに直結するので、耕深自動制御機能付きのトラクタが望ましい。

[具体的データ]

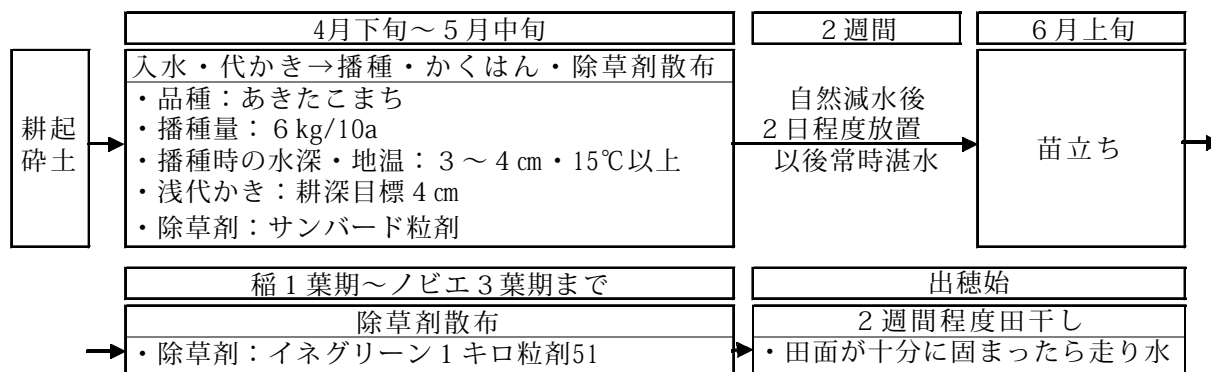


図1 湛水散播代かき法の作業体系

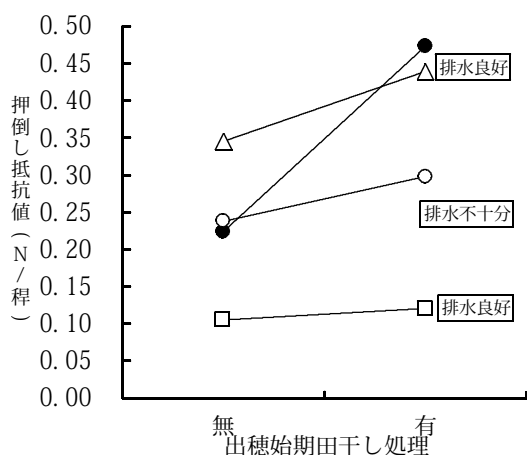


図2 出穂始期の田干しが倒伏抵抗性に及ぼす影響 (平成17年)

田干し期間は出穂始めから2週間  
 押し抵抗値は出穂15日後にDIK-7401で測定  
 品種あきたこまち  
 ●：湛水散播かくはん法・湛水出芽  
 ○：湛水散播かくはん法・落水出芽  
 □：カルパーコーティング表面散播  
 △：移植栽培  
 上記栽培法のうち、湛水散かくはん法・落水出芽のみ圃場が異なる  
 図中□で囲った文字は出穂始期の田干しにおける圃場の排水状況を示す

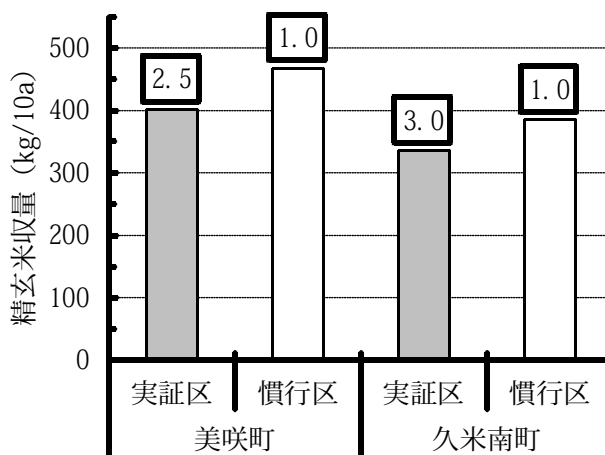


図3 現地実証試験における水稲収量 (平成18年)  
 □内数値は倒伏程度 (0～4)  
 実証区は機械移植栽培の移植期に湛水直播した品種あきたこまち  
 実証区では出穂始期田干し処理を行った  
 美咲町の慣行区はカルパー湛直 (機械点播)  
 久米南町の慣行区はキヌヒカリ移植栽培  
 実証区の施肥はリニア型被覆肥料N成分量4.9kg/10a  
 慣行区の施肥は農家の慣行による

[その他]

試験研究課題・事業名：中山間地域に適した水稲「あきたこまち」、「コシヒカリ」の湛水直播栽培技術の開発

予算区分：県単

研究期間：平成16～18年度

関連情報等：平成15年度試験研究主要成果

「岡山57号」(現「ふっくらももこ」)を用いた省力的湛水表面散播栽培技術 (情報)